

学部

2020 年度  
「卒業生満足度調査結果の検討」

大学院

2020 年度  
「修了生満足度調査結果の検討」

大阪電気通信大学  
教育開発推進センター

Center for Educational Development(CED)

## 目次

### 学部

#### 2020 年度 「卒業生満足度調査結果の検討」

工学部		
電気電子工学科	.....	4
電子機械工学科	.....	7
機械工学科	.....	8
基礎理工学科	.....	10
環境科学科	.....	12
情報通信工学部		
情報工学科	.....	15
通信工学科	.....	17
金融経済学部		
資産運用学科	.....	20
医療福祉工学部		
医療福祉工学科	.....	21
理学療法学科	.....	24
健康スポーツ科学科	.....	25
総合情報学部		
デジタルゲーム学科	.....	26
情報学科	.....	28
共通教育機構		
人間科学教育研究センター	.....	30
英語教育研究センター	.....	32
数理科学教育研究センター	.....	33

### 大学院

#### 2020 年度 「修了生満足度調査結果の検討」

大学院 工学研究科		
先端理工学専攻	.....	37
電子通信工学専攻	.....	38
制御機械工学専攻	.....	39
情報工学専攻	.....	41
大学院 総合情報学研究科		
デジタルアート・アニメーション学専攻	.....	42
デジタルゲーム学専攻	.....	43
コンピュータサイエンス専攻	.....	44
大学院 医療福祉工学研究科		
医療福祉工学専攻	.....	45

学部

2020 年度

「卒業生満足度調査結果の検討」

## 2020年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2021年 5月 28日

工学部 電気電子工学科

2020年度主任 中瀬泰伸

[A]本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか？  
について。

「専門的な知識・技能」、「物事を論理的に考える力」の得点が高い。これは、専門科目において教員の懇切丁寧な指導が評価された結果と思う。毎年入学生の基礎学力の程度が幅広く、上位学生向けに難度の高い話題も織り交ぜながら、下位学生もできる限り救済していく方針は今後も継続する。

「知識やツールを組み合わせて課題に取り組む力」、「他人と協調して物事に取り組む力」も得点が高い。これは主に実験科目の反映と思われる。装置やツールの使い方のマニュアルの整備やサポート課の協力によるレポート作成のきめ細かい指導が評価されたと考える。今後も継続していく。

「国際的な視野(異文化理解)」、「国際的な視野(国際交流)」については毎年得点が低い。専門教育としては海外との技術交流に重きを置いていないため、想定内の結果である。国際交流を希望する学生には留学制度等を利用してもらうのがよいと思う。

[B]本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて、全体的に評価してください。について。

「基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)」の得点が高いのは、手を動かすことで座学で学んだ理論の実感が得られるからと思われる。教材は易しくもなく難しくもなく、まじめに取り組めば正解に辿り着くように工夫されていることもその要因である。実験・演習科目は今後も学生に積極的に取り組んでもらう。

「卒業研究やゼミにおける指導」の得点が高いのは、教員による卒業生への適切な指導によるところが大きい。それぞれの卒業生のレベルに合わせたテーマを設定することで無理なく研究を進めることができる。そのため達成感も得られやすい。今後も懇切丁寧な指導を心掛ける。

### 自由記述

[D] あなたが本学で良かったと思う点を書いてください。

1.電気電子工学科では、特定の分野に偏ることなく、電気電子の分野全体をまんべんなく学習する方針を取っている。それを好意的に評価する学生が多いと感じた。今後もこの方針で対応していく。

- ・専門的な分野を幅広く学ぶ事ができ、とても良かったと思う。
- ・細かく専門の分野が分かれていたので自分の学びたい分野について学びやすいと感じた。

- ・専門的な教科の教員がそろっており、勉強が分かりやすかった。
- ・それぞれの分野毎に、教員の方々がわかりやすく授業していただけた。
- ・工学での幅広い専門の教員がおり、その中で自身の得意とする分野を見つけることができれば、それを中心に学ぶことができること

2.教員が学生の理解度に合わせて親身に個別対応する面倒見の良さが評価されたと思われる。学習にさまざまな困難を持つ学生の情報は学科内で共有することで、それぞれの事情を理解した上で指導していく。

- ・専門的な分野を分かりやすく教えてもらった
- ・研究が自由にできて、好きなことができた
- ・非常に分かりやすい授業をされました。就職の時には、ていねいな対応をされました。
- ・先生方がとても接しやすかった。
- ・適切な指導をしてくださる教員が多数いらっしゃる。
- ・授業のわかりやすさ、授業外での教育制度
- ・授業では基礎から教えてくれる

3.電気関係の資格取得に力を入れている。資格講座を多数開講しているが、実験サポート課の協力もあり、学生からは好意的に評価されている。資格取得の奨励は今後も継続する。

- ・資格取得や就職活動の情報が多くまた、情報の伝達が速いところ。
- ・講義以外の案内。(資格取得、就職活動)が充実している。
- ・資格取得に対して、力を入れてくれていたこと。おすすめの資格の紹介や、筆記や実技の指導などもくわしく説明してくれた点。
- ・資格に対する手厚い支援がとてもよかった。
- ・資格をとるために必要な練習をたくさんさせていただけた点(第1種・2種電気工事士)
- ・資格の実習が非常に分かりやすく、積極的に取り組めた。

**[E] あなたが本学で改善すべきと思う点を書いてください。**

1.出欠の取り方(授業に出ていないのに出席にできるシステム)、さぼっている学生への対応に関する不満が多い。個々の不正に対して厳格に対処はしないものの、その学生の性格や行動パターンは熟知しているので大筋では各学生の頑張り度合が成績に反映されているはずである。また、本人が勉強しないと合格点が取れない授業内容になっているので、学生にはその点を説明して理解してもらう。

- ・学習意欲が無い者をもっと落とすべき
- ・けいたい出席において、けいたいではなく学生証を使った管理に変えた方が良いと思う。
- ・授業をまじめに受け、自分で課題を提出している人間が正當に評価されない点。
- ・出席登録の面倒臭さ。学生証1枚で簡単に出席できるようになってほしい。

2.レポートを手書きではなくワープロによる作成を希望する意見が多い。しかし、レポートの基本は手書きであるため、低学年(1～2年生)では手書き作成してもらう。学生にはその意図を説明する。

- ・レポートをワード等を使って書かせて欲しかった
- ・レポートの手書き制度はなくして欲しい。
- ・レポートの提出が手書き指定しているのを改善してほしい
- ・実験レポート、講義での有効なPCの使用。

[F] あなたにとってとくに役に立った。あるいは印象に残っている科目名と、どういう教育内容が役に立ちましたか。

合格が難しい科目ほど役に立ったという意見が多い。各先生の忍耐強い指導により、自分で努力して理解できた、わかったという経験が好印象につながったと思われる。今後も安易に合格点を与えることなく、粘り強く指導していくことが必要と感じた。

コメントの多い科目は、電気数学、半導体工学・演習、電磁気学、制御工学など。

[G] あなたの現在の感想も含めて、大阪電気通信大学への要望や提案などを自由に記してください。

全体的に好意的な意見が多い。今後も教員と学生間のコミュニケーションを大切に、有意義な学生生活を送ってもらう。

以上

# 2020年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2021年5月15日

工学部 電子機械工学科

2020年度主任 月間満

## 1. 卒業生満足度調査結果全般について

総合評価点は 7.7 点(10 点満点中)であり, 19 年度に引き続き, 前年度よりも評価点が上昇した点については, コロナ禍の状況を踏まえても, 高く評価できる結果である。

逆に, 19 年度よりも低下した細目は, 「国際的な視野(異文化理解)」と「留学制度」の2点であった。これは世界的なコロナ禍の影響により, 留学や国際会議等の機会が失われたことが強く影響していると思われる。オンライン実施等の工夫はされているものの, やはり実体験に及ばないのが実情である。

一方, それ以外の細目について昨年度と同等以上の評価を頂いたことは, 本学教職員各位の御努力の賜物であり, ここに厚く御礼申し上げたい。

## 2. 要望・自由意見について

以下, 比較的回答数の多かった要望や自由意見を抽出する。

### (1) 情報伝達手段の改善について

本件は 19 年度の満足度調査においても, 自然災害や鉄道の運休に伴う休講情報等が取得しにくかったという点で要望が多かった。20 年度はコロナ禍に伴う遠隔授業の実施に伴い, 要望が多くなったものと思われる。具体的には, 現状の情報連絡手段として, メールやサイト, 掲示板等の複数の手段が混在しており, 学生から見てわかりやすい一元的な情報伝達手段を望む意見が多かった。今後は, My Portal による連絡に一元化されていくと思われる。

学科の対応としては, 20 年度より Slack にて学科チャンネルを開設し, 全学生とスムーズにやり取りできる体制を整えている。今後は, 学科内の全学年に漏れなく浸透させることで, 情報取得の苦手な学生をフォローできる体制を更に強化していく必要がある。

### (2) 情報機器の更新について

PC や学内Wi-Fi 等, 導入時から年数を経過しているものもあるためか, 機器更新に対する要望が多かった。特に学内 Wi-Fi 等の通信環境については, 21 年度からの PC 必携化に伴い, 今後も要望が高まっていくものと思われる。

### (3) 部活やイベントの活性化について

コロナ禍による部活やイベントの中止や抑制に伴い, 要望が多かったものと思われる。しかし, 逆に言えば, これらは学生にとって大きく重要なものであることを示しており, コロナ終息後の速やかな復帰再開を目指していく必要がある。

以上

## 2020年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2021年 6月 10日

工学部 機械工学科

2020年度主任 阿南 景子

### [A] 学生が獲得した知識・能力に関する項目について

学生が獲得した知識・能力に関する項目では、「専門的な知識・技能」「知識やツールを組み合わせて課題に取り組む力」「他人と協調して物事に 取り組む力」の項目は平均 3.8～3.9 と高い値になっている。

「専門的な知識・技能」をある程度獲得したと考えている学生が多いようである。講義・実習・卒業研究を通じて学生の社会人基礎力の獲得を目指す学科教員の取り組みが成果として現れたものと考えられる。一方、「リーダーシップ」「新しい課題を発掘する創造力」については他の項目に比べやや低めの値にとどまっている。協調性に代表されるメンバーシップの獲得については教育成果が表れているが、リーダーシップの獲得については、卒業研究やプロジェクト型教育等を通じ引き続き検討していく必要があると考えられる。

また、「国際的な視野」を「獲得していない」、「あまり獲得していない」の回答をした人の数が他の項目に比べて多くなっている。この傾向は昨年、一昨年と同様であり、機械工学科だけでなく、工学部全体でも同様になっている。これは、工学部には留学生が少なく、外国人との交流がほとんどないことが学生の評価に現れていると考えられる。この問題は学科単独で解決できる問題ではなく、大学全体で議論すべき問題であると考えられる。しかしながら、国際的視野および外国語によるコミュニケーション能力は多くの企業でも求められていることもあり、外国語科目だけではなく、専門科目や卒業研究を通じ、外国語に触れる機会を増やしていきたい。

### [B] 授業科目群、教育設備・機器に関する項目について

授業についての評価を見ると、「基礎専門科目・専門科目（実験・実習・演習など）」が昨年度より0.2ポイント上昇の4.1、「卒業研究やゼミにおける指導」が昨年度と同じく3.9となっている。また、「講義用実験室の設備・機器の充実度」の評価が3.9と高い値になっている。自由記述欄の記載にも、実験設備が充実している、実験科目を多くしてほしい、といった意見が見られ、機械工学科の多くの学生が、実験・実習や卒業研究で手を動かすことに興味を持っていることが見て取れる。

一方、「TAによる指導」の評価が前年度よりやや低下し、3.7になっている。自由記述欄には、TAが親切に教えてくれた等の意見もあり、おおいに学科の学部教育の助けとなっているものの、近年、大学院生の数が少ないために多くの4年生にSAを依頼しており、その影響が表れているのかと思われる。TAによる教育効果向上のためにも、成績上位層には大学院進学を積極的に進める等についても努力していく必要があると考える。

「卒業研究やゼミにおける指導」において、「よかった」および「ややよかった」との評価が昨年度よりも増加し、71%と高い割合を示している一方で、「やや悪かった」および「悪かった」との評価が8.5%ある。卒業研究は大学における教育の集大成とも言えるものであり、「やや悪かった」および「悪かった」と感じる学生数を減らすように、各研究室において検討していく必要がある。

事務サービスについては、前年度よりやや評価が低下している。これは、COVID-19の感染拡大により

授業形態が急遽変更になったことや、それに伴い就職活動の把握やサポートが難しくなったことが原因と考えられる。自由記述欄には、就職課のサポートが良かったとの意見が複数あり、臨機応変にご対応いただいた職員の皆様に感謝する。また、大学からの連絡が遅い、との意見が複数みられたが、大学生として自ら情報を収集する力の育成にも力を入れる必要があると感じた。さらに、新棟の研究室がオープンすぎるため集中力を欠くとの意見が複数あった。卒研究生が集中して取り組める環境を整える必要があると感じた。

### 総合評価について

総合評価は2018年度の6.7に対して0.3ポイント上昇しているものの、2019年度の平均値7.1に比べ0.1ポイント低下している。また、工学部平均より低いポイントにとどまっているため、引き続き、教員個人および学科全体で、評価結果と自由記述の内容を検討し教育への取り組みの改善を図り、総合評価の上昇に務めていきたい。

## 2020年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2021年6月10日

工学部 基礎理工学科

2020年度主任 森田 成昭

本学科の特徴は、工学の基盤となる科学(数学・物理・化学)の専門知識を獲得させ、それらを活かす理論や技法を修得させる教育を実践していることである。これにより、物事を「根っこ」から追究・分析する基礎力と真の応用力を持ち、先端科学技術から教育まで、幅広い舞台で活躍できる理数系ジェネラリストを育成している。

2020年度卒業生満足度調査において、[A] 知識や能力の獲得(5段階評価)、[B] 授業科目や教育設備・器機(5段階評価)、[C] 総合評価(10段階評価)の3項目が数値的に評価された。2019年度、及び2020年度における調査結果の平均を、全学、及び工学部と比較して表1にまとめた。[A] 知識や能力の獲得、及び[B] 授業科目や教育設備・器機の両方が、本学科は全学、及び工学部と比較して同点か高得点であり、両方が2019年度と比較して2020年度は平均が上昇した。しかし、[C] 総合評価において、本学科は全学、及び工学部と比較して平均が低く、2019年度と比較して2020年度は平均が下降した。

表1. 卒業生満足度調査のまとめ

	2019年度			2020年度		
	全学	工学部	本学科	全学	工学部	本学科
[A] 知識や能力の獲得	3.5	3.5	3.3	3.5	3.6	3.6
[B] 授業科目や教育設備・器機	3.6	3.7	3.5	3.6	3.5	3.8
[C] 総合評価	7.3	7.4	7.2	7.3	7.4	7.1

調査結果の詳細をさらにみると、[A] 知識や能力の獲得において、幅広い分野にわたる教養(4.0)、物事を論理的に考える力(3.9)、他人と協調して物事に取り組む力(4.0)といった項目の得点が高く、逆に専門的な知識(3.7)、国際的な視野(異文化理解)(2.7)といった項目の得点が低かった。この傾向は、工学の基盤となる基礎力をしっかりと身に付けさせた上で、幅広い舞台で活躍できる理数系ジェネラリストを育成するという学科の教育方針と合致しており、工学における特定の専門分野のスペシャリストを育成する他学科と比較して、専門的な知識が得られなかったという評価に繋がっていると考えられる。しかし、[B] 授業科目や教育設備・器機では、基礎専門科目・専門科目(講義)(4.0)と基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)(4.2)の得点が高く、学科に特徴的な専門教育の質が高く評価されている。このことから、特定の専門分野に偏らず、幅広い工学の基礎力を与えることができていると考えられる。さらに、卒業研究やゼミにおける指導(4.6)の得点が高く、低学年から少人数グループによるプロジェクト学習を積極的に取り組ませることが卒業研究に繋がっており、実社会において真に活躍できる理数系ジェネラリストとしてのポテンシャルを身に付けた上で、自信を持って卒業していると読み取ることができる。しかし、[c] 総合評価において厳しい評価となっており、卒業時における総合的な満足度が得られていないという声をしっかりと受け止め、学科として教育と研究の質をさらに向上させていく必要があることを確認した。

本学科では、2-4年生を混ぜて受講させる学年横断型の少人数ゼミ(基礎理工学ゼミナール1-5)を5科

目(10 単位)開講しており,自ら問題を探索し,協同的にその問題を探求し,得られた成果を伝えるスキルを身に付けさせる教育を実践しているが,自由記述において印象に残っている科目に本科目をあげる学生が多く,本学科における特徴的な教育効果が得られていると考えられる.具体的には,「上下関係のつながりができた」,「自分で色々なことをしていかなければいけないことが役に立った」,「人に説明する力やグループワークなど協力する力を身に付けられる」,「主体性を学べる場だと思う」といった記述がみられ,将来を担う専門家として社会で求められている実践力を身に付けて卒業していることが伺えた.また,「学生に親身な教員が多く,教員と関わる機会が多い」,「教員の指導が非常に手厚かった」,「話を聞いてくれる教員が多く,学生の意見をしっかり聞いてくれた」,「教授と学生とのコミュニケーションが良くとれる大学だと感じた」といった自由記述がみられ,教員の努力により,質の高い教育が達成できていることが示された.一方,「教職科目の授業の内容をもう少し役立つものにしてほしい」,「教職科目で,実践的なものをもう少し増やしてほしい.模擬授業や学習指導要領の書き方など」といった自由記述がみられ,教員養成の専門学科ではない弱みが指摘されている.今後,教職科目において,学外非常勤講師と連携しながら教育の質を高めていきたい.

# 2020年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2021年6月14日

工学部 環境科学科

2020年度主任 齊藤 安貴子

## 1. はじめに

2020年度の卒業生は、未曾有のコロナ感染拡大の中、休講となった4月、さらには、新棟への引っ越しがあり、卒業研究もままならない部分があった。また、学生によっては突然のウェブ授業に戸惑った学生も多かった印象がある。学科の総合評価は昨年度よりも低下していたが、予想していたほどではなく、それぞれができることを頑張ったことが自由記述からもうかがえる。それらをふまえ、環境科学科の2020年度卒業生満足度調査結果についてその結果の概要と今後の満足度向上のための対策について報告する。

## 2. 環境科学科の調査結果の概要

2020年度の環境科学科、工学部全体、大学全体、及び、環境科学科2019、2018、2017年度のそれぞれの獲得数値の合計を表1にまとめた。総合評価は2019年度と比較して0.4ポイント低下したが、自大学全体や工学部よりは高い水準を保っていた。

表1. 獲得数値の合計のまとめ

	U (2020)	工学部 (2020)	全体 (2020)	U (2019)	U (2018)	U (2017)
[A] 知識・能力の獲得	3.6	3.6	3.5	3.7	3.4	3.5
[B] 授業科目群や教育設備・ 機器など	3.9	3.5	3.6	3.9	3.6	3.6
[C] 総合評価	7.5	7.4	7.3	7.9	7.2	7.2

### [A] 知識・能力の獲得

知識・能力の獲得については2018年度から2019年度に大幅にポイントが改善していた（2019年度報告書参照）。その水準から大きく低下することはなく、各項目0.1ポイント程度の変化にとどまっている。2019年度に大きく向上したのは、新カリキュラムに向けた授業内容の見直しの効果が出てきたものと考えており、その効果が継続しているものと考えられる。

低いポイントが継続している項目として同様国際的な視野（8）が挙げられ、は2.9～3.2ポイントと、他の項目と比較すると相対的に低い。昨年度の報告書にて改善したいと記述したが、2020年度のコロナ禍にあっては国際的な活動も制限されたため、改善が難しかったものと考えられる。これは次年度に継続して改善すべき点として注視していきたい。2019年度と比較して上昇した項目は、専門的な知識・技能（2）（0.1ポイント）、国際的な視野（異文化理解）（8b）（0.1ポイント）、コミュニケーション能力（9）（0.1ポイント）であった。一方で低下した項目は、知識やツールを組み合わせる課題に取り

組む力 (5) (0.1 ポイント)、国際的な視野 (専門分野) (8a) (0.1 ポイント)、他人と協力して物事に取り組む力 (11) (0.2 ポイント)であった。これらの低下は、卒業研究を実施する期間が短かったことも原因の一つだと考えられ、2021 年度は改善すると見込んでいる。

全体的に急上昇した昨年度のポイントを保っており、学科のこれまでの取り組みの成果が出ていると考えている。

#### [B] 授業科目群や教育設備・機器など

授業科目群や教育設備・機器などについては、大幅に向上した 2019 年度の値と同じポイントを維持している。これまでと同様、授業科目群高いポイントを示している項目は、基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など) (5) と卒業研究やゼミにおける指導(6)である。丁寧な指導を心がけており、各教員の努力が報われたと考えている。しかし、卒業研究やゼミにおける指導は高い水準を保っているものの 0.2 ポイント低下した。これはコロナ感染拡大下での卒業研究の実施の難しさを示していると考えている。

昨年度上昇傾向にあった総合科目や互角についても、さらにポイントが向上しており、総合科目の先生方の努力が実った結果だと考えられる。図書館は 2019 年度ポイントが向上したが 2020 年度はコロナの影響が出ていると考えられ 0.1 ポイントの低下となった。パソコンなどの IT、講義室、実験室などの設備 (8~13)、TA による指導(14)も高いレベルを保っている。これは TA の質・レベルが向上したことに加え、実験科目・演習科目の内容の見直しなどの方向性が正しいことを示している。

一方で、事務サービスのポイント低下が目立っており、それが全体の平均を下げているという傾向が見られた。学務課事務サービス(16)は 0.2 ポイントの低下、寝屋川就職事務サービス(17)は 0.3 ポイントの低下となった。一時期見られたような一部の設備・事務対応に対する不満は、自由記述コメントにみられないが、遠隔での指導やサービスの提供が難しかったことが反映されたと考えられる。

合計は 3.9 ポイントで、前年度と同様高い水準を保っている。工学部 3.5、大学全体 3.6 から考えると、この項目についても環境科学科の学生の満足度は高いといえる。

#### [C] 総合評価

総合評価は 7.5 ポイントであり、2019 度の 7.9 ポイントから大きく低下した。一方で 2018 年度は 7.2 ポイントであったことから、コロナ禍においても、ある程度の高い水準のサービスは提供できたと考えている。これらは工学部の 7.4(2019 年度 7.4)ポイント、大学全体 7.4(2019 年度 7.3)ポイントよりやや高い。自由記述欄から、卒論・研究室での教育二関する満足度が高いことがうかがえる。特に卒業研究・研究室に対する好意的なコメントが目立っていることから、各教員の丁寧な指導が高いポイントの要因となっていると考えている。

### 3. さらなる満足度維持・向上のための対策

昨年度から継続して、以下の 3 点について対策を検討している。

#### 3.1. 新カリキュラム・内容の定着・内容の前倒し実施

昨年度、新カリの前倒し実施・内容の定着を目指して学科内の改革を実施し、全体的に大幅にポイントが向上した。それにより学科の方向性として問題ないことが示唆されている。そこでこの数値を保ち、かつ、さらに向上させるため、「食品衛生」、「住環境設計」という新たな柱を<sup>[1]</sup>中心としてさらなる改善を試みる。食品衛生に関しては、2019年5月に食品衛生管理者および食品衛生監視員の養成施設として認定され、また、住環境設計については管工事施工管理技士の指定学科となるよう申請検討中である。これらの学生の将来が見える・将来に役立つ・卒業時に資格が得られるカリキュラムにより、真卒業時の満足度をさらに上昇させる。

また、小中学校、高等学校にて、今後SDGsが必修となる。SDGsには食環境・住環境に関する内容が盛り込まれており、本学科の新たな柱の定着には大きな追い風となる。新入生への教育はもちろん、在校生についてもSDGsに関する知識の定着をはかり今後の持続可能な社会に貢献しうる人材を育てることにより社会で必要な知識を大学にて学んだ実感を与え、満足度向上につながると考えている。

### 3.2. リーダーシップの養成

一昨年度からリーダーシップ(10)を養成するための施策を進め、昨年度から検討を行っていた。具体的には、5月初旬の学外研修でのリーダー創出、および、初年次教育として申請した1年生前期の実験科目である「生活化学実験」でのSA活用によるリーダー創出検討を行う予定であったが、2年連続で新型コロナの影響で、学外研修は中止となり、また、学生同士の密な接触を避けるため、生活化学実験においてもリーダーの創出検討はできていない。具体的な検討予定内容は2019年度報告書<sup>[2]</sup>に記載したため、ここでは省略する。

### 3.3. プロジェクト等の活性化<sup>[1,3]</sup>

大学祭等の行事(19)のポイントは前年度からさらに改善して3.6ポイントと2年前と比較すると大幅に上昇した。これは本学科の特徴でもある豊富なプロジェクト学習のプログラムの活性化が影響していると考えられる。当学科では、「ベリーベリープロジェクト」、「カフェラボプロジェクト」、「電池プロジェクト」などのプロジェクト型教育を推進する一方で、「地域連携プロジェクト/ボランティア入門」等の総合科目(キャリア形成群)を通じて、大学祭等と同様なイベントに関わることができるように積極的に勧めている。引き続き、このような活動を活性化させるように努力することで、全体の満足度も向上させることができると考えている。しかし、今年度もコロナ感染拡大が収まらず、プロジェクト学習に関しても学生を集めにくい状況がある。密にならないよう工夫しながら、プロジェクトを進めていく方法を模索しなければならないと考えている。

[1]中田亮生・齊藤安貴子：環境科学科の取り組み事例紹介、2017年12月20日、全学教授会にて発表(本学四条畷キャンパス)。

[2]2019年度卒業生満足度調査結果検討報告書

[3]中田亮生・齊尾恭子：アクティブ・ラーニング型新設科目「地域連携ボランティア入門」の充実、2018年6月14日、2018年度教育開発推進センター主催FD+SD研修会開催FD+SD研修会にて発表(本学寝屋川キャンパス)。

# 2020年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2021年 5月 10日  
情報通信工学部 情報工学科  
2020年度主任 小森政嗣

## 1. 総合的評価の結果について

2019年度卒業生満足度の総合的評価（項目[C]）は10段階の主観評価において平均評価値が7.0となる結果となった。2017年度平均6.7、2018年度平均6.9、2019年度平均7.0と上昇してきた評価を、コロナ禍での調査であったものの維持することができたことを示している。その傾向を踏まえて、現行の学科教育の課題と改善方針を卒業生満足度調査の結果に基づいて検討した。

## 2. 知識・能力の獲得について

質問項目[A]群の「本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか」に関する回答は、2017年度・2018年度が平均3.3であったのに対して2019年度・2020年度はともに平均3.4という結果であった。このように、卒業生の本学科での学びに関する評価の傾向はこの数年で大きな変化は認められないものの、比較的高い水準を維持できたと考える。

自由記述の回答には、卒業研究に関係する肯定的な記述が目立つ（3. 記述する結果とも整合する）。卒業研究では、指導教員が卒業研究生の研究進捗状況を定期的に報告させつつ適切な助言を与えて議論・検討の機会を設けるほか、中間発表会など本格的な研究発表の訓練の場を複数回設定し、短・中期的なプロジェクト実施を体験する。卒業研究の総決算となる、最終的な学科全体の卒業研究発表会の予稿や口頭発表の準備、卒業論文の執筆に関しても、発表練習・添削指導を何回も綿密に指導する。そのような指導が有効に機能している結果が肯定的な回答につながっていると考える。

質問項目[A]群の中で、明確に平均評価値が低いものは、これまで同様「国際的な視野（専門分野）」「国際的な視野（異文化理解）」「国際的な視野（国際交流）」である。これら教養に強く関わる知識・能力への興味をもたせていく教育が必要であることを示している。

## 3. 授業科目群や教育設備・機器などの評価について

質問項目[B]群の「本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて全体的に評価してください」に関する回答は、小計区分B1～B7、B8～B14、B15～B19について、それぞれの平均は2019年度（3.6、3.6、3.3）と比較すると、2020年度の結果（3.5、3.4、3.2）では、減少幅は非常に小さいものの、いずれの項目でも低下しており注意が必要である。

カリキュラムに関わる回答項目B1～B7では、大きな変化は認められないが、「B6. 卒業研究やゼミにおける指導」が3.9から4.1へと上昇している。また、「B4. 基礎専門科目・専門科目（講義）」「B5. 基礎専門科目・専門科目（実験・実習・演習など）」についても相対的に高い評価を得ていた。卒業研究や専門科目への評価の高さは自由記述欄への回答からもうかがわれる。一方で総合科目や教職科目に関する評価は相対的に低かった。情報工学科の学生の能力や気質に合わせた教育が行われるよう今後とも緊密にAS, AH, AEセンターと連携や情報交換を行っていく必要があるだろう。

また施設やサービスに関する回答項目である[B]群 B8～B14 では大きな変化は認められない。コロナ禍においても図書館の評価が大きく変化しなかったことは、図書館のさまざまな取組によるところが大きいと言えるだろう。事務サービスに対する回答項目[B]群 B15～B19 については「大学祭等の行事」に対する評価が最も低く、これはコロナ感染拡大に伴う学園祭の中止を反映していると考えられる。その他の項目については大きな変化は認められない。

#### 4. 自由記述欄への回答について

「本学で良かった点」については、友人や仲間ができたことを挙げた学生が非常に多く、学生同士の良好な社会的なつながりを構築することが大学の満足度に寄与することが示唆される。また、研究室の指導教員との関係についても多くの言及があり、コロナ禍にあっても大学生活の中で多様な人間関係を育むことができたことを示している。

「改善すべき点」についてもっとも多く指摘を受けた項目は新棟（新 A 号館）の研究室環境であり、全体の 2 割弱を占めた。P 学科の研究室の中でまだ半数未満の研究室しか移転していないにもかかわらずこれほど多くの指摘を受けたことは、新棟における研究環境の改善が学生満足度の向上における重要な課題であることを示している。特に指摘が多かったのは、他研究室や廊下からの騒音の問題であった。P 学科は他学科と異なり、廊下に直接面した研究室が多いことが、騒音問題の指摘につながった可能性がある。今後は、学生の卒業研究活動の環境改善のため大学と連携しながら積極的に取り組んでいく必要があるだろう。

## 2020年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2021年6月10日

情報通信工学部 通信工学科

2020年度主任 村上 恭通

※自由に記載下さい。

[A]本学で獲得した知識・能力

学科の強み（得意なところ）と弱み（苦手なところ）を知るため、過去3年の結果から3.7以上のもの、および、3.0以下の項目を抽出した。

**2020年度の強み：**「2 専門的な知識・技能(4.0)」、「7 困難に直面してもそれに対処していく力(3.9)」、「11 他人と協調して物事に取り組む力(3.9)」、「1 幅広い分野にわたる教養(3.8)」、「3 物事を論理的に考える力(3.8)」、「5 知識やツールを組み合わせて課題に取り組む力(3.8)」、「6 考えていることを図解などで表現できる力(3.8)」

**2019年度の強み：**「2 専門的な知識・技能 (3.8)」、「11 他人と協調して物事に取り組む力 (3.8)」、「5 知識やツールを組み合わせて課題に取り組む力 (3.7)」

**2018年度の強み：**「11 他人と協調して物事に取り組む力 (3.8)」、「2 専門的な知識・技能 (3.7)」、「3 物事を論理的に考える力 (3.7)」、「7 困難に直面してもそれに対処していく力 (3.7)」

**2020年度の弱み：**「8c 国際的な視野(国際交流) (2.6)」、「8b. 国際的な視野(異文化理解) (2.8)」、「8a. 国際的な視野(専門分野) (3.0)」

**2019年度の弱み：**「8c 国際的な視野(国際交流) (2.7)」、「8b. 国際的な視野(異文化理解) (2.9)」、「8a. 国際的な視野(専門分野) (3.1)」

**2018年度の弱み：**「8c 国際的な視野(国際交流) (2.5)」、「8b. 国際的な視野(異文化理解) (2.6)」、「8a. 国際的な視野(専門分野) (2.9)」

以上より、本年度も昨年度同様に「専門的な知識・技能」・「他人と協調して物事に取り組む力」・「知識やツールを組み合わせて課題に取り組む力」が育まれたといえる。また、2018年度に上位であった「困難に直面してもそれに対処していく力」が再び上位に入っている。さらに、いずれの項目も以前より0.1～0.2ポイント上昇している。また、3.7以上の項目が、従来3～4項目であったのに対し、本年度は7項目もあり、特に「物事を論理的に考える力」は昨年度より0.3ポイント上昇している。これらはまさに学科教育で力を入れている点であるため、うまくいっていることが確認される結果となった。

一方で、「国際的な視野」の全項目については従来同様獲得することができておらず、さらに、すべての項目について昨年度より0.1ポイント下がっていることは残念である。語学が苦手な学生が多い傾向を表しているように感じた。「コミュニケーション能力」・「他人と協調して物事に取り組む力」については、社会人スキルとして必須であるため、PBLを2018年度入学生から導入して主体性開発に取り組んでいるところである。

[B]本学の授業・設備・機器の評価

学科の強み（得意なところ）と弱み（苦手なところ）を知るため、過去3年の結果から3.7以上のもの、および、3.3以下の項目を抽出した。

**2020年度の強み：**「6 卒業研究やゼミにおける指導(4.3)」、「5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)(4.1)」、「11 講義室等の環境(空調、照明等)(4.0)」、「13 授業用実験室の設備・機器の充実度(4.0)」、「4 基礎専門科目・専門科目(講義)」(3.9)、「10 パソコン等のIT機器の充実度・利用しやすさ(3.8)」、「12 講義室等の映像・教材提示装置等の充実度(3.8)」、「14 TAによる指導(3.8)」、「1 総合科目(外国語以外)(3.7)」、「9 図書館の利用のしやすさ(3.7)」、「17 寝屋川就職課／四條畷就職課 事務サービス(3.7)」

**2019年度の強み：**「6 卒業研究やゼミにおける指導(4.1)」、「4 基礎専門科目・専門科目(講義)」(3.7)、「5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)(3.7)」、「11 講義室等の環境(空調、照明等)(3.7)」、「13 授業用実験室の設備・機器の充実度(3.7)」

**2018年度の強み：**「6 卒業研究やゼミにおける指導(4.1)」、「10 パソコン等のIT機器の充実度・利用しやすさ(3.9)」、「5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)(3.8)」、「9 図書館の利用のしやすさ(3.8)」、「11 講義室等の環境(空調、照明等)(3.8)」

**2020年度の弱み：**「19 大学祭等の行事(3.0)」、「7 教職科目(3.1)」、「18 留学制度(3.2)」、「3 総合科目(英語科目以外の外国語科目)(3.3)」

**2019年度の弱み：**「19 大学祭等の行事(3.2)」、「18 留学制度(3.3)」、「3 総合科目(英語科目以外の外国語科目)(3.3)」、「15 シラバスや学生便覧等の諸資料 (3.3)」、「16 学務課/四條畷学務課 事務サービス(3.3)」

**2018年度の弱み：**「3 総合科目(英語科目以外の外国語科目)(3.1)」、「19 大学祭等の行事(3.2)」、「18 留学制度(3.2)」

以上より、「卒業研究やゼミにおける指導」と「基礎専門科目・専門科目」（講義・実験・実習・演習すべて）について満足度が高かったことが窺える。これは実学教育に力を入れている成果が表れていると考えられる。このことは[A]の結果からも裏付けられている。また、本年度は3.7以上の高い評価の項目が10項目に増えていた。

一方、「大学祭等の行事」、「留学制度」、「英語以外の外国語学科目」などの評価が低かった。特に「大学祭の行事」は3.0と過去最低の評価であったが、コロナ禍で大学祭が中止となったためと考えられる。

今後は、本学のキーワードである「人間力と技術力」を育くむ方針のうち、前者にもより力を入れていく必要があると感じられる。なお、現在、人間力育成については既に取り組み始めているところである。

[C]総合評価について：

総合評価が2018年度6.8、2019年度6.9、2020年度7.2と順調に高くなっていることは、Slackを導入したことにより、近年の学生とのコミュニケーションに力を入れている点、教員間で学生情報を共有し、フィードバックしている取り組みなどが効果を上げていると感じている。

自由記述欄について：

自由記述欄についても、すべて詳細に読み、内容を分析した。ここでは、逐一、コメントすることは避けるが、「よかった点」、「改善すべき点」、「要望」に記載されていることは、上述の結果を裏付けていることが、具体的な内容で記載されていて、大変参考になる。本年度は、過去2年と比較して概ね高評価である印象を受けた。

「よかった点」では、具体的に講義名をあげて評価してくれているものも多く、非常に励みになる。また、「改善すべき点」や「要望」は丁寧かつ具体的に指摘をしてくれているので、非常にありがたい。

「上下の交流の機会が少ない」という意見がいくつかあった。この点を改善すると、離学率の改善にも繋がると予想されるので、新入生合宿研修を導入する予定であったが、コロナ禍のため中止となったため、今後の課題となってしまった。

## 2020年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2021年 5月 12日

金融経済学部 資産運用学科

2020年度主任 袖山 則宏

2020年度卒業生（2017年入学）については、2019年度卒業生（2016年入学）に比して卒業生満足度が総合評価で0.6ポイント低下している。

前年度は0.6ポイント上昇していたことから、この総合評価の低下要因について整理する。[A]本学で獲得できた知識や能力は前年度とほとんど変わらず、[B]本学での生活についての授業科目群や教育機関・機器についても、コロナの環境下、同等の評価が得られている。その面では、生徒数が減少する中で、教員数も縮小する傾向が見られたことは多少なりとも、学生にとっては、入学してきた来た時のイメージと比較して当初の卒業時のイメージと大きなギャップを感じ、総合評価には影響を与えてしまったことが考えられる。

また、2020年度の卒業生の満足度の低下は、2019年度の卒業生のうち志望外入学者の影響も少なからず残されていたかもしれない。学生自体の人数は、今後縮小傾向にあるが、各教員と事務局が連携を強めることに努め、学生の興味に対応して、少しでも満足度を他学部に劣らないレベルとすることを目標としたい。

## 2020年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2021年 5月 13日

医療福祉工学部 医療福祉工学科

2020年度主任 藤川 智彦

### 1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

教育目標は、カリキュラム・ポリシーの通り、高度化・多様化する医療技術に対応できる人間力と基礎的知識・技術力について教授研究し、医療・福祉機器の開発や医療現場において活躍できる総合医療エンジニアと高度技術に対応できる臨床工学技士を育成するために工学と医学の基礎を十分に学習させることにある。具体的には、医用工学系について ME1種および ME2種実力検定試験、医療機器情報コミュニケーター MDIC、臨床工学技士国家試験に合格させることにある。

### 2. 教育改善や授業点検、成績評価（平均値、成績分布、合格率など）について

- 1) 専門科目の授業改善プランを提示し、学習環境改善を図った。
- 2) 1,2年次に対して計4回の統一問題による実力試験をおこなう予定であったが、コロナ禍のため、新たに web 試験を導入し、12月と3月の2回の実施となった。その中で、成績優秀者を表彰して学生のモチベーション向上を図った。基礎工学分野の成績優秀者はのべ33名、医用工学分野はのべ44名、基礎医学分野はのべ120名の60%以上得点者を出した。これは、e-learningの学習時間も大きく関連しており、その後の学習過程にも大きく影響するものであると考えている。
- 3) 医科医療事務検定三級はコロナ禍の学習環境となり、合格者は2年次1名であった。
- 4) 第2種 ME 技術実力検定試験はコロナ禍のため、実施されなかった。
- 5) 医療機器情報コミュニケーター MDIC はコロナ禍の学習環境となり、合格者は3年次3名であった。
- 6) 第1種 ME 技術実力検定試験はコロナ禍のため、実施されなかった。
- 7) 臨床工学技士国家試験に23名が受験し、合格者は22名の合格率95%であった。

### 3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について

例年、教務委員および臨床実習担当教員、さらに、卒業研究指導教員またはグループ担任を中心とした履修指導につとめ、「履修の取りこぼし」防止をおこない、学生自身が国家試験受験資格に必要な科目の履修状況を確認できるような資料を用いて、学生自らが学修状態を把握し、それを管理できるように務めている。また、本学科独自で展開している学生証を用いた来学確認システムにより、本学の四條畷事務部との密な連携によって、連続5日間の欠席学生を抽出し、離学に至るプロセスを解析できるデータを収集している。しかし、今年度はコロナ禍の遠隔授業等になり、教員との面談の対応も取れず、早期の学生相談等も実現できなかったが、その環境の中でも、遠隔授業等の小テストなどを用いた出席確認を用いて、学科で出席状況を把握し、離学者が少なくなるように努めている。現在、来学できていない学生の把握もできており、今後はこのシステムも活用していく予定である。また、就職指導においても、卒業研究の指導教員が研究室配属学生の状況を把握し、学生自身がしっかりとした進路を見つけられるように、指導教員が積極的に関与し、学生との密接な関係が構築できるように努めている。

#### 4. 卒業研究指導について

本学科では研究室配属の前に「キャリアデザイン」「プレゼミ」の科目を設け、卒業研究や技術系社会人として必要な基本的スキルを身につけさせている。これによって、視野を広くさせ、学生自身の将来の選択肢を多くさせる工夫をおこなっている。なお、卒業研究配属に必要な研究室訪問も「プレゼミ」の授業内でおこない、訪問学生に対して教員または先輩たちが個別に対応するようにしている。卒業研究は4年生前期末の中間報告、後期中期末の概要提出と口頭試験、後期末の論文提出のすべてを満たす必要があり、その内容は生体医工学・福祉工学の各関連分野における調査・実験系の研究となっている。コロナ禍でありながら、2020年度は学科会議で個々の学生の状況を確認し、学科全体で卒業研究の質の維持に努めた結果、本学科所属教員の研究室における卒業研究の不合格者は2名となったが、入学定員数80名に対して、卒業生は79名であった。なお、これからも学科内で情報を共有し、学生のケアを怠らないよう務めていくつもりである。

#### 5. 卒業生満足度調査結果について

##### 1) 総合評価に関する分析

教務委員および実習担当教員、さらに、卒業研究指導教員またはグループ担任を中心とした履修指導をおこなった結果、個々の学生状況を把握しやすい環境を整えたが、コロナ禍の面接授業の中止や卒業研究の時間の低下も生じ、2020年度の経験した教育の総合評価（10段階）は昨年度の高得点の7.4より、0.2ダウンの7.2になったと推察される。

##### 2) 専門分野と獲得した能力に関する分析

例年通り、臨床工学技士の国家資格取得に向けた適切な授業をおこない、コロナ禍でも同じになるように、尽力したが、専門知識・能力獲得度（5段階）は昨年度の3.8から0.2程度ダウンとなる結果となった。国際的な視野に関しては医療従事者である臨床工学技士の国家資格取得の軸があるため、例年3.0程度であるが、今年度は卒業研究の時間も少ない影響を受け、さらに、0.3程度ダウンとなった。なお、国際的な視野の養成は現状の教育方針に沿った環境構築を引き続き学科内で検討していく予定である。

##### 3) 授業科目および卒業研究に関する分析

卒業研究指導教員またはグループ担任からの学生状況を会議等で共通認識することにより、個々の担当者だけでなく、学科教員全体でサポートできる体制を構築している。しかし、コロナ禍における遠隔授業、または、卒業研究の時間の減少などにより、専門教育の実習および卒業研究の満足度評価（5段階）は昨年度の4.0と4.4の高得点から0.3程度ダウンとなり、3.7と4.0となる結果となった。同様に、総合科目群も0.3程度ダウンしており、遠隔授業の影響が大きいと推察される。

##### 4) 自由記述に関する分析

自由記述における内容の印象に残っている科目では学科先生の科目が多く記載されており、充実した教育であったことが窺えた。また、幅広い分野の授業をわかりやすく、丁寧に適切な指導をいただいた、臨床工学技士の役に立ったなど、個々の専任教員の授業における良いコメントや高い評価が多くあった。また、優しい先生が多い、研究室が充実していた、雰囲気がとても良かったなどの記述もあり、卒業研究を通して、各教員が研究室の学生と信頼関係を構築していることも推察できる。また、分野ごとの専門的な知識を学ぶことができ、病院や企業などの幅広い職業につけることができる、また、自分の興味があることに取り組みやすい環境があるなどの記述もあり、本学科の目標と一致する記述も多くあった。

## 5) 教育設備に関する分析

四條畷キャンパス全体の問題と考えられるが、いわゆるアメニティ施設や通学のバスなどの意見が多く、学生の不満を解消させるハードウェアやシステムの整備が必要であると考えられる。

## 6. その他、特記事項（学科独自の教育、アクティブラーニング、離学者対策など）など

技術者としての必修であるドキュメンテーション能力の基礎を教授するために、1年次で「アカデミック・ライティング」を開講しており、図表の記述、参考文献の提示などの基本的な知識を低学年時から徹底させる試みをおこない、2年次の「電気電子工学実験」により、学生自身で経験した実験の報告書の作成をおこない、さらに、3年次の「キャリアデザイン」の開講により、幅広い分野の知識に得て、4年次の「卒業研究」の中で、プレゼンテーションや卒業論文の作成を可能にするスキルが身につくように、学年の進行に伴い、学生自身でスキルアップができるようにしている。また、3年次の「生体機能代行医用機器学実習」や4年次の「生体機能代行装置学実習」では、学生自身が興味のある部分を中心に事前に調査(グループワーク)し、その結果をプレゼンすることにより、積極性を獲得させるとともに、その結果から学生の知識レベルを外部講師が確認し、実習に役立てている。このような教える側と教わる側に双方にメリットのあるアクティブラーニングを取り入れている。これより、学生自ら興味のある部分に積極的に関わることにより、授業への意欲が飛躍的に向上すると思われる。また、3年次の「ヒト型ロボット創造製作実習」では、板材から部品を金属加工により製作し、学生たちが自ら発案した二足歩行ロボットを製作するなど、実習・演習科目群は学生の自主性を重んじるように心がけている。さらに、学生中心の心電図読図の勉強会を開催し、高学年の学生が低学年の学生に教える指導もおこなっている。これについては、病院において即戦力として機能する能力であると期待される。同時に、先輩・後輩の人間関係を学び、人間形成にも役立っている。また、企業・病院に就職した卒業生が実習補助員として授業に参加し、学生(後輩)に授業内容はもちろん、社会人としての心構えや実体験などを伝え、学生から大変好評を得ている。

## 7. 添付資料

特になし。

## 2020年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2021年 5月 26日  
医療健康科学部理学療法学科  
2020年度主任 小柳磨毅

### 1. 知識や能力の獲得

平均は、3.7点であり、比較的高い評価が多かった。2019年度に3点未満で最も評価が低かった、国際的な視野に関する評価が、改善したことは喜ばしい。今後も、講義や卒業研究において、国際的な情報収集を行い、さらに海外から講師を招聘するなどの、国際交流にも努めていきたい。

学科全体で取り組んでいる点コミュニケーション能力は、昨年に比べ、0.2ポイントの減点であった。今後さらにカリキュラムを充実させる必要がある。グループワークを主体としたカリキュラムを充実させる結果、リーダーシップや協調性、が改善したと思われる。

### 2. 授業科目、教育設備・機器

基礎専門科目、専門科目、卒業研究などの満足度は、いずれも4点を上回り高かったが、昨年比でややポイントが減少した。遠隔講義の影響が考えられるが、その状況でも、概ね、講義や実習、ゼミ活動が適切に実施されていると思われる。図書館と設備については3点後半の評価であり、昨年比でややポイントが増加し、学生の満足度が高まったことがうかがえる。事務サービスに関しては概ね、4点の評価に上昇しており、充実が伺える。

大学祭等の行事に対する評価も、上昇した。また一昨年度から始めた、「なわてん」への参加も今後さらに充実させたい。

### 3. 自由記載

専門基礎および専門科目が、国家試験と臨床実習に役立ったとする記述が多く見られた。知識と技術の教育水準をさらに高めていきたい。

一方、学生の不満としては、通学の不便に関する記述が見られた。キャンパス全体の問題として、駐車場を含む、通学の利便性向上に努める必要がある。

以上

## 2020年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2021年 5月 26日

医療健康科学部 健康スポーツ科学科

2020年度主任 山下 陽一郎

### A. 知識や能力の獲得

教養の獲得、専門分野の知識・技能の獲得および論理的思考力の獲得において高い満足度を得ており、その上で強調力や課題発掘できる創造力の獲得にも満足度は高く評価している。このことから、専門性だけでなく社会的なかかわりの中で問題解決能力が成長していることを実感させる。さらに、課題に対処する能力やコミュニケーション能力の向上にも満足度は高く、社会に適応する能力を身に付けていることを実感している。

### B. 授業科目群、教育設備・機器など

卒業研究やゼミにおける指導は高い評価を示している。ゼミ活動や卒業研究は大学生生活の集大成であり、教員も専門性を活かして学生への個別指導を行うことのできるため、そのことが学生に伝わったと思われる。また、教育環境の整備（空調、照明塔）や視聴覚機器の整備においても高い満足度が示され、環境整備の充実が重要であることを実感させられた。加えて、間接的に授業に関わる項目として四條畷学務課や四條畷就職課の事務サービスに高い評価を示している。日頃の事務部の対応の丁寧さ、誠実さが評価された結果と考える。

### C. 総合評価

総合評価は10段階で7.3と昨年度より0.4ポイント向上している。その上、10段階評価で8点を選択したものが最多であり、8点以上の評価が全体61名中30名と約半数に及ぶ。この高い評価を今後も維持させるだけでなく今以上に向上させ、学生の満足度を高いレベルに持ち上げていく取り組みをしていきたい。このために、講義科目や実習・実技科目などの教育面の充実を図りつつ、教員各自が学生との密接な関係を構築すること、学生の要望に応じていけるように更なる工夫することは勿論、教員同士が良好な関係を保ち連携していく努力が必要であると思われる。

### 自由記述

#### 「良かった点」

専門的な学問分野の講義や実技・実習の授業に満足感を得ていた。また、部活動やゼミ活動を通じた学生間の出会いを有意義であったとする評価が多く見られた。その他、自由度が高く、やりた分野の勉強や好きな趣味を広げることができたことも高い評価が得られていた。

#### 「改善点」

学習効果を上げる取り組みや人的交流能力の向上を図るプログラムの採用を求める意見もあった。地理的要因による不便さを感じている意見は例年と同様に多数あった。また、福利厚生施設の利用に関する改善要望もあったが、本年度はコロナ禍における対応もあり、善処されていたと思われる。

## 2020年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2021年 5月 28日

総合情報学部 デジタルゲーム学科

2020年度主任 上田 和浩

デジタルゲーム学科の2020年度の操業評価は、昨年、一昨年度に続いて、7.2と大きな変化はなかった。項目を細かく分析すると、昨年度より改善している項目が多いのは評価できるが、下がった項目に関してはより一層注意、改善が求められる。

- 1) [A] 本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか？という項目に対して、1 幅広い分野にわたる教養、3 物事を論理的に考える力、4 的確な判断力、6 考えていることを図解などで表現できる力、7 困難に直面してもそれに対処していく力、8c. 国際的な視野（国際交流）、10 リーダーシップ、12 新しい課題を発掘する創造力等の項目の点数が上がっている。半面、2 専門的な知識・技能、国際的な視野（専門分野）、9 コミュニケーション能力、11 他人と協調して物事に取り組む力などは若干点数が落ちている。[A]の総合的なポイントは3.5で昨年度と変わらないので年度による誤差の範囲と見なすこともできるかもしれないが、ポイントが落ちている項目に関しては、コロナ禍により遠隔での授業形態が続いたことによる影響が出たのかもしれない。特に9、11の項目に関してはそれが強く出たのではないかと分析する。卒業生の満足度ということで、特にアンケートに強く影響するであろう、卒業研究/制作において遠隔の形式で行ったゼミが多かったのが響いたのかもしれない。この点に関しては今年度の感染の状況を慎重に判断しながらも、可能な限り学生の満足度を高める形で卒業研究/制作のゼミを運用していきたい。
- 2) [B] 本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて、全体的に評価してください。という項目に関しては、総合的なポイントは3.5から3.6へと若干ポイントがアップしている。1 総合科目(外国語以外)、3 総合科目(英語科目以外の外国語科目)、5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)、7 教職科目、8 図書館の図書・雑誌等の充実度、9 図書館の利用のしやすさ、11 講義室等の環境(空調、照明等)、12 講義室等の映像・教材提示装置等の充実度、13 授業用実験室の設備・機器の充実度、14 TAによる指導、15 シラバスや学生便覧等の諸資料、16 学務課/四條畷学務課 事務サービス、17 寝屋川就職課/四條畷就職課 事務サービス、18 留学制度。19 大学祭等の行事などの項目についての改善がみられる。総合科目や大学の事務関連に関して評価が改善されたのに対し、6 卒業研究やゼミにおける指導のポイントが下がってしまったのが反省点である。これは先ほどの[A]項目であげた改善が重ねて求められるものである。
- 3) 自由記述での記載は、おおむね好意的な意見を寄せてもらっている反面、不満点も少なからず挙げられている。四條畷キャンパスの立地の関係でバス便が不便なことや、食堂、購買施設関連の不満が例年おおいのだが、今年度遠隔授業が多かったことで、幾分控えめな印象を持った。しかし決して対策により改善しているわけではないので、今後も学生への配慮を忘れないようにしたい。具体

的には学生に対し、登校、面接での指導を行う際にバス便の時刻に合わせた集合時間を設定したり、食堂、購買部の営業時間のアナウンス等、教員レベルでも可能な範囲の対応はしておきたい。また、ネット環境や、情報伝達に関する不満が年々多くなってきている印象が強い。ネット環境に関しては今年度遠隔授業の形式が多くなったので特に不満を持つ学生が増えてきている。自宅のWi-Fi環境が能力不足のケースもあるかと思うが、今後も Moodle 等のネットワークを使った授業支援ツールを活用するための環境構築は重要である。また、情報伝達に関する不満も多く、その手段が Web 掲示板とメールが中心なのも最近の学生の気質に合わなくなりつつあるのかと分析する。LINE や Discord 等のより学生にとって親和性の高いコミュニケーションツールの選択も視野に入れることが必要な時期に来ているのかもしれない。

## 2020年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2021年6月10日

総合情報学部 情報学科

2020年度主任 南角 茂樹

[A] 本学での大学生活を通して、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか？  
教養、知識技能、論理的に考える力、創造力に関しては昨年度と同評価である。

判断力、課題に取り組む力、表現力、リーダーシップ、協調して取り組む力に関しては、いずれも評価を上げており、特に4年生の評価とは言え、直近の新型コロナウイルス感染症対策のためほとんどの授業がオンライン形式になった2020年度の評価に引きずられるにもかかわらず、大きく評価を上げたリーダーシップおよび協調して取り組み力に関しては、社会的にも大変な状況に対応してきたという自信がそのベースとなったと考えられる。上記項目の平均だと3.8となり2019年度を上回る。

しかしながら、満足度調査における[A]の平均評価が下がったのは国際的な視野の評価(しかも、専門分野、異文化理解、国際交流と3項目も存在する)が大きく下がったためである。これはある意味当たり前であり、日本人同士の交流さえあまりなかった2019年度の評価に引きずられたためと考えられる。

しかしながら、国際的な視野に関する評価は元々他の項目に比較して低く、この対策として、国際交流センターとの協調など今後考えて行かねばならない。

[B] 大学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などに関して全体的に評価してください。

総合科目、基礎専門科目、専門科目全てに渡って評価を下げている中で、卒業研究やゼミにおける指導のみ評価をあげている。卒業研究やゼミに関しては元々高評価であったが、更に評価をあげた。

ただし情報学科では卒業研究は3年時に行うため、2020年度卒業生は幸い新型コロナウイルス感染症対策の影響は受けなかったため、従来からの研究室単位のフェース・ツー・フェースのきめ細かい卒研指導の効果があったと考えられる。今後もこの指導方針を続けて行きたいと思う。なお、余談であるが、ほぼオンライン方式の2021年度卒業生の卒研やゼミに対する評価によって、この考えが正しいかどうかの検証がなされると考えている。

設備に関しては2019年度とほぼ同評価であるが、特にTAへの高評価が続いていることは特筆すべきであり、今後もTAの親身な相談を生かしていきたいと思う。

その他事務サービスや行事の評価が下がったのは、新型コロナウイルス感染症対策のためと考えられ、2021年度の評価と比べていきたい。

[C]に関して10段階評価は細かすぎると思われ7.7と7.4の評価の差にどの程度の意味があるのかは、不明であり、今後の推移を見ていきたい。

[自由記述]

ここでもTA制度が評価されており、[B]における評価と一致している。

専門性に関しても評価されており, JABEE の意義があったと考える。

また 3 年時に卒業研究を実施する点も評価されている。

役に立った科目や教育内容に関しては, 全教員の名前があがっており, 各教員の努力の成果だと思う, またその評価された内容としては分かりやすいと深く専門的の両者がキーワードとなっており, 教員にとってもその両者の両立は, 難しいが努力しなければならない。

最後に, 交通環境に関する不満がますます増えている印象がある, これは専用のスクールバスを廃止した影響も考えられ, 一度きちんと調査を実施して, 廃止の評価していただきたい。

以上

# 2020年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2021年6月10日

共通教育機構 人間科学教育研究センター

2020年度主任 平沼 博将

## 1. 総合科目の満足度(評価)について

2020年度の卒業生満足度調査結果における総合科目(外国語以外)の満足度は平均で3.6、総合科目(英語科目以外の外国語科目)の満足度平均は3.3であり、基礎専門科目や専門科目の満足度に比べると低い評価となっている。しかし、毎年授業期間内に実施している授業アンケートでは、ここ数年、総合科目の総合評価が科目全体の平均を上回っており、今回の調査結果においても総合科目(外国語以外)の満足度は昨年度より0.1ポイント上昇していることから、授業改善に継続して取り組むことが肝要であると考えられる。

## 2. 総合科目に関連する自由記述について

次に、卒業生満足度調査の自由記述から、総合科目に関連する記述を科目群別に抜粋した上で考察する。なお、例年、卒業生満足度調査では、通常1・2年生で履修する総合科目に関する記述は多くないが、今回の調査では、学生からの積極的な意見・感想が多数寄せられた。

### (1)総合科目(講義・演習系科目)について

総合科目全般については、“一部、一般教養の授業内容の難易度が低く、あまり励む気になれなかった”、“人数が多すぎて、座席確保に苦労した”といった意見があり、この点に関しては、今後改善していきたいと考える。一方、個別の科目に関しては、下記に示した通り、幅広い知識やスキルが得られたことや就職活動に役立ったことなど、積極的な意見や感想が目立った。

- ・「日本語上達法」…“初めての授業でいろいろていねいに教わった”
- ・「現代社会を考える」…“社会学について広く学べる。そのうえでどう考えるか”
- ・「異文化の理解」…“日本の近隣国について学べる”
- ・「情報活用リテラシー」…“正確な情報収集能力が身につく”
- ・「情報社会と情報倫理」…“あたりまえの知識。しかし受けておいた方がいい”
- ・「経済学の世界」…“わかりやすい” “就職活動で役に立った”
- ・「家族のくらしと社会」…“知らなかった家族のあり方や、現実がどんなものか学べた”
- ・「日本国憲法」…“この授業による感想文によって自分の文章力の向上を感じた”
- ・「キャリアデザイン演習」…“就職についての講義が役立った”
- ・「総合ゼミナール」…“障がい者がどう思い行動するのが役に立つ”

### (2)総合科目(英語以外の外国語科目)

外国語科目(英語以外)も、各科目(中国語、韓国語、ドイツ語、フランス語)については、高く評価する意見が多く寄せられた(下記参照)。

その一方で、“外国語の科目にもっと力を入れてもいいと思った”、“外国語は、もっと充実させて欲しいと感じました”、“外国語科目を学科に関わらず自由に履修できるようにすることを希望します。(中略)自分の学科では学んでみたかった第二外国語を講義決めの際に決められなかったため、これを改善して欲しいです”など、英語以外の外国語科目の充実を求める声が複数あった。

- ・「中国語」…“分かりやすく、初心者でも学びやすい”“おもしろかった”“分かりやすかった”
- ・「中国語初級 1/2」…“英語の次に大切だと思う。学ぶきっかけになればいいと思う”
- ・「韓国語1/2」…“講義内容がとてもよく、楽しく学べた”
- ・「ドイツ語」…“教え方がすばらしい。わかりやすい”“英語以外の外国語に触れるいい機会になった”  
“英語と形式が似ているから覚えやすい”
- ・「ドイツ語1/2」…“とてもわかりやすかった”
- ・「フランス語1/2」…“はじめてのフランス語でしたが、とてもわかりやすかった”

### (3)総合科目(スポーツ実習)

「スポーツ実習」に関しては、例年多くの記述(感想)がみられるが、2020年度の調査でも“(1年の時に)人とのかかわりを持てたことがよかった”“他学科と交流があり、楽しかった”“体を動かす機会が得られて良かった”などの積極的な感想が記述されていた。特に、ニュースポーツに関しては、“運動が楽しいと思えた”“変わったスポーツが遊べてよかった”など学生の印象に残ったようである。

一方で、施設面に関しては、寝屋川キャンパスに体育館を設置してほしいとの意見が複数あった。

## 3. 人間科学教育研究センターの取り組み

人間科学教育研究センターでは、所属する教員がそれぞれの専門性を活かしてリレー形式で講義を行う「現代社会を考える」や、日本語活用能力の向上を目指す「日本語上達法」など、学生に幅広い教養を身につけさせ、社会人としての基礎能力を育てるとともに、大学における学びの基礎学力を養成する取り組みにも力を注いできた。そして2020年度からの新カリキュラムでは、これまでの取り組みや総合科目の内容を更に充実させるべく科目群を再編するとともに、新規科目を多数設置したところである。

また、授業以外の学習支援としては、2018年度後期から、大学での学び方を指導する「講義マスターへの道」(自由参加型のミニ講座)を実施してきたが、2020年度からは、学習支援システムであるMoodleを活用したオンラインによる個別レポートライティング指導として「レポートマスターへの道」をスタートさせた。

人間科学教育研究センターとしては、今後もこうした取り組みを通して、学生の満足度を高める努力を継続していきたい。

以上

## 2020年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2021年6月14日

共通教育機構／英語教育研究センター

2021年度 主任上垣公明

### (1)総合科目(英語科目)評価点について

2020年度の全学評価点は3.5で、前年度と同じであった。この調査は卒業生を対象としたものであり、低年次を中心に開講されている英語科目の記憶や印象は薄れがちである。そのことを考慮すると、このような数値は低いものではなく、本学の英語教育についての一定の評価を示すものとする。

### (2)自由記述について

大学全般に対する改善の要望として「英語に力をいれていないと感じた」「英語力に力を入れてほしい」という回答があった。このような要望に応えるには、昨今の社会における英語のニーズの高まりに対応すべく、大学全体として英語教育をどのような位置づけるのかということも考える必要があるように思われる。

英語の授業に関しても回答が寄せられたが、特に多かったのは外国人特任講師によるコミュニケーションの授業についてのもので、全部で14件あった。全て好意的なものであり、「先生としての技術が高く、スムーズに受けられた」「楽しくスキルを身につけられた」「英語に苦手意識があったがとても楽しく学ぶことができた」「英語の発音や文を読む勉強として良いと思う」などの、教員の授業スタイルや工夫を評価するものが目立った。一方で、「他では感じられない空気感が印象的だった」「日本語を話せる海外を知る外国人で、始めて海外の人と話す時の相手としては理想的...」といった、外国人講師であることに依拠したものもあった。これは、外国人と話すこと自体に消極的な学生が多い一方で、それを刺激的に感じている学生もいることを示すものであり、2020年度からのカリキュラムにおける2年次のIntermediate English(コミュニケーション系)、3年次のAdvanced English(プレゼンテーション系)の運営を考える際に(外国人教員を増やすなど)、参考にしたい。

リーディング科目については「英語の大変さ、必要性を知った」「グローバルになれた」という回答があった。これらは、英語の技能を高めるだけでなく、英語の重要性についても授業で説明している教員がいることを示すものである。また、「英語を通して多くの文化を学べた」という回答もあり、教員によっては異文化についても授業で触れていることを示している。それを知ることも英語教育の一環として重要なことである。このような回答を参考にしつつ、今後は、英語力の涵養だけでなく、それに関連する「英語の重要性」や「英語圏の文化」などを授業で説くことの重要性についても、FDを活用するなどして英語教員全体で共有。

その他の科目では「英語スキルアップセミナー」について「自分の好きな様に学べるのでオススメ」「それぞれの目標に対して、課題の提案をしてくれて、実力をグッと伸ばすことができた」という回答があった。この科目は2020年度からのカリキュラムではIntermediate English(資格系)に引き継がれた科目であるが、回答の内容から、PCを使って自身で取り組む形態の学習方法を好む学生がいることが読み取れる。そのような学生は本学に一定数いると考えられ、2021年度からの全学的なPC必携化とも連動させて、今後の授業運営や学習指導を考える際に参考にしたい。

### (まとめ)

英語教育研究センターとしては、今回のアンケートの結果を参考にして、2020年度からのカリキュラムをより充実させていきたい。特に、コーディネーター制の徹底やFDの活用によって、専任教員および非常勤講師の共通理解のもとで、全ての授業の質的担保に努めたい。加えて、個別学習支援、研究室ごとの学習支援、多読学習支援などを通じて、本学の英語教育の発展に貢献していきたい。

# 2020年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2021年6月10日

数理科学教育研究(AS)センター

2020年度主任 溝井 浩

## 1. 設問[A]について

ASセンターが主に関係する項目は1~4であると思われる。基礎専門科目として、数学と物理学の講義・演習と実験では重点を置いて教育している項目である。大学全体では「1 幅広い分野にわたる教養」(2018年・2019年度ともに平均3.7)が3.8と+0.1ポイントの上昇がみられた。他の項目については、「2 専門的な知識・技能」(2018年度3.8→2019年度3.9→2020年度3.9)、「3 物事を論理的に考える力」(2018年度3.7→2019年度3.8→2020年度3.8)、「4 的確な判断力」(2018年度3.6→2019年度3.6→2020年度3.6)については昨年度比で変わらず高評価を維持できた。「1 物事を論理的に考える力」が上昇した背景には、ASセンターが特に力を入れている数学・物理科目の基礎学力向上の取り組みの成果が表れているものと考えられる。

表1に学部ごとの伸びをまとめた。工学部、情報通信工学部、総合情報学は0.1ポイント上昇した項目がみられる。これまでの我々の取り組みが実を結びつつあることを伺わせる。一方、医療福祉工学部ではマイナスポイントが目立つ。医療福祉工学部という専門性の強い学部のため、遠隔主体であった2020年度の講義の影響もあるのではないかと考えられる。

表1

学部ごとのポイントの伸び【2020年度(2019年度)△変化】

	工学部	情報通信工学部	医療福祉工学部	総合情報学部
1 幅広い分野にわたる教養	3.8(3.8)△+0	3.6(3.6)△0	3.8(3.9)△-0.1	3.8(3.7)△+0.1
2 専門的な知識・技術	3.9(3.8)△+0.1	3.9(3.9)△0	3.9(4.0)△-0.1	3.8(3.9)△-0.1
3 物事を論理的に考える力	3.8(3.8)△+0	3.7(3.7)△0	3.8(3.8)△0	3.8(3.9)△+0.1
4 的確な判断力	3.7(3.6)△+0.1	3.5(3.4)△+0.1	3.6(3.8)△-0.2	3.7(3.6)△+0.1

## 2. 設問[B]について

ASセンターが関係する項目は4と5であり、大学全体では「4 基礎専門科目・専門科目(講義)」3.8、「5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)」3.9と昨年度と同水準を維持している。[B]の平均が3.7であることから、相対的に良い評価を得ていると言える。表2に学部ごとの伸びをまとめた。工学部では増減は見られなかったが、情報通信工学部と総合情報学部ではポイントの伸びがみられる。この2学部の特性から、2020年度の遠隔という講義形態もプラスに寄与した効果もあると考えられる。一方で、医療福祉工学部では、設問[A]と同様のマイナス傾向がみられる。

表2

学部ごとのポイントの伸び【2020 年度(2019 年度)△変化】

	工学部	情報通信工学部	医療福祉工学部	総合情報学部
4 基礎専門科目・専門科目 (講義)	3.8(3.8)△0	3.8(3.7)△+0.1	3.8(3.9)△-0.1	3.8(3.8)△0
5 基礎専門科目・専門科目 (実験・実習・演習など)	3.9(3.9)△0	3.9(3.7) △+0.2	3.7(3.9)△-0.2	3.9(3.8)△+0.1

### 3. 自由記述について

AS センターに直接的に関係する内容は限られているが、授業に関する具体的な意見が出されており、授業改善への指針として貴重なものであるといえる。今後のカリキュラムマネジメントと各科目の講義へフィードバックをかけるために慎重な分析を進めたい。

(1)数学系科目に関する意見として、「微分積分・演習:分かりやすく、楽しめる数学」、「微分・積分:大学でよく使用するので勉強した方が良い」、「線形代数:多くの分野で活用されるため、理解しておくとな後々役に立つ」、「線形代数:大学でよく使用するので勉強した方が良い」といった専門の学びへつながる学習ができていることを評価する意見が見られた。また、「講義だけではなく数学教室などでサポートしてもらえるのはとても良かった」と授業以外での学びの支援も評価されている。一方で、例年散見される「難しすぎる」「易しすぎる」といった、習熟度別クラス編成への不満を表すような記述が、今回の調査ではかなり減ったことは特筆に値する。

(2)物理科目に関する意見として、「高校では物理の科目を取っていなかったの、基礎をしっかりと教えていただけで助かりました」、「物理学・演習:高校では学べない物理の延長を学べる」といった意欲的な意見が見られた。また、実験について「物理学実験:レポートの書き方」の指導に力を入れていることを評価する意見も多くみられた。「レポートを書く力が特についた。必須科目での経験が卒論まで非常に役に立った」といった意見がある一方で、これまではほとんど見られなかった「レポートをワード等を使って書かせて欲しかった」、「レポートの手書き制度はなくして欲しい」といった意見が、今回の調査の回答に数多くみられた。手書きするからこそ身につくこともあり、学生には「まずは手書きでレポートの書き方の基本を習得し、その後、PCでの作成へ進む」ことの意義を、今後はきちんと説明していく必要がある。また、「実験のサポートが手厚かった点」、「実験などで人と協力することができ、自分から人間関係を作ることができた」、「実験の時、先生が付きっきりでわかるまで教えてもらえました(1年生の時)」「実験:触れたことの無い設備で学べた」「実験(いろいろ):みんなと協力し、コミュニケーション力をあげれる」など、今年の調査では実験に対する好意的な意見が例年になく数多くみられた。

(3)その他、特定の AS の科目へ寄せられた意見ではないが、関連するものとして特筆すべき意見を取り上げると、「講義の理解を深めるため、演習の授業を設けるところ」のように演習付き科目の意義を理解して受講し、なおかつ演習の時間に「教員やTA などからの指導が良かった」といった TA や SA に質問や相談でき

たことを高く評価する意見が多くみられた。また、「工学系の知識がほとんどない状態から、幅広く多くのことを学ぶことができ、色々なことに挑戦することができました。楽しくすごすことができたということが良かったと思う点です」、「授業を基礎からしていただいたので、高校の頃にわからなかったことを勉強することができた」、「実験の数が多く様々な技術や知識を学べたこと。一番この大学で良かったのは、どの授業においても、基礎であるあたり前のことから教えてくれたこと。そのおかげで、高校のときではわからなかったことが分かり、授業についていけなくなることもなかった」、「大学レベルの学習や、実験でいままでなかった考え方や、とらえ方が身についた」、「数学や物理の基礎を教えていただいた点」といった、習熟度別クラス編成がうまく機能していることを伺わせる記述が多くみられた。

#### 4. まとめ

AS センターの専任教員・非常勤教員は、1～2 年次生の授業を数多く担当しており、今までに培ってきた授業の工夫やノウハウは蓄積され、これを共有してきている。共通教育機構では、さらに授業のねらいや目的を明確にし、学生へのオリエンテーションの充実を図りながら、習熟度別クラスの編成、専門科目との連携を強化して、全学的な基礎教育の充実を目指している。また多く非常勤講師を含めて数学・物理の科目毎にそれぞれ責任者(まとめ役)の専任教員を配置しており、時折発生する学生からの注文や意見に対しても迅速に対処できる体制を整えている。AS センターでは、入学時のプレイスメントテストを実施して、習熟度別クラスによる授業運営を推し進めてきた。複数学科を合わせてクラス分けすることは、単に習熟度別授業を実現するためだけではない効果もある。「他学科との交流が欲しい」といった声が幾つもあり、学科単独のクラスと、複数学科によるクラスとでは授業中の雰囲気も異なるようである。今回の調査の回答には、例年よりも、我々の取り組みを評価する意見が多くみられた。今後も、共通教育機構としての役割を果たせるよう、習熟度別クラス間の調整、基礎専門科目と専門科目の連携を深めていきたい。

大学院

2020 年度

「修了生満足度調査結果の検討」

## 2020年度修了生満足度調査結果検討報告書

2021年 6月 14日

大学院工学研究科先端理工学専攻  
2020年度専攻主任 柳田達雄

先端理工学専攻において、2020年度は9名が博士前期あるいは後期課程を修了し、9名の修了生満足度調査の回答を得た。10段階による総合評価の平均は7.7であり、前年度の6.3に比べ1ポイント以上の改善がみられた。

「本学での大学院生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか。」の設問に対し、獲得度の平均が高かった項目は「専門的な知識・技能」、「物事を論理的に考える力」、「困難に直面してもそれを対処していく力」など多くの項目で前年度よりも向上した。これらの傾向をみるとしっかりと基礎を身につけようとする学生の姿勢が伺えた。先端理工学専攻では、「理工学分野の基盤となる基礎科学力を習得し、それぞれの専門分野において柔軟な発想をもって適応できる応用力を身につけている」ことを博士前期課程における学位授与方針(ディプロマ・ポリシー)のひとつとしており、それぞれの分野における専門的な知識や技能を身につけて本課程を修了したと捉える学生が多かったと考えられる。また学会などの学外活動が良い経験となったという声も多くあり、これらの活動は継続して実施して行くことが望まれる。さらに、「国際的な視野(専門分野)」、「国際的な視野(異文化理解)」、「国際的な視野(国際交流)」は、前年度、2.6、2.2、2.3であったが、本年度は3.2、3.1、3.1と全て向上した。先端理工学専攻では、英語科目を選択必修としており、また、国際共同研究を活発に行っている研究室もいくつかある。またコロナにより国際会議なども遠隔で開催されたためこれらの影響があったのかもしれない。また「コミュニケーション能力」「リーダーシップ」は前年度の2.9、2.9より4.0、4.0と大きく向上している。これについては、どのような効果により向上したのか定かではないが、学生間の活動を活発化するような研究室運営ができたとも考えられる。

「本学での大学院教育を振り返り、以下の授業科目群や設備・器機などについて全体的に評価して下さい。」の設問に対し、評価の平均が高かったのは「研究やゼミにおける指導」は昨年度に引き続き高評価を維持している(前年度4.1、本年度4.2)。また「大学院履修要覧等の諸資料」については評価が上がった。一方「教務課・学生課／四條畷学務課 事務サービス」における評価も2.3から3.6と向上した。コロナ下において事務部門の方々の支援があったと思われる。また、「研究用実験室の設備・機器の充実度」も3.3から3.7へと向上した。自由記述欄には「先生の指導も手厚く、こまったときは道を示してくれました。」など評価があった。

## 2020年度修了生満足度調査結果検討報告書

2021年 6月 10日

大学院工学研究科電子通信工学専攻

2020年度専攻主任 前川 泰之

大学院工学研究科電子通信工学専攻では2020年度は8名が卒業し、その全員からアンケート結果が提出されている。アンケート結果を見ると、[A]、[B]の各項目とも満足度の合計は、平均点でいずれも0.5ポイントほど減少して3.6となっている。特に減少が激しいのは、[A]の項目では、4の的確な判断力(前年度4.3から3.6へ0.7ポイント減少)、8の国際的な視野(平均で0.9減少)、10のリーダーシップ(0.9減少)、および11の他人と協調して主体的に物事に取り組む力(1.5減少)である。また[B]の項目では、2の発表や質疑応答を伴う演習形式の授業(0.7減少)、4の研究やゼミにおける指導(0.8減少)、11の大学院履要覧等の諸資料(0.9減少)、および12の学務課事務サービス(0.9減少)という評価結果になっている。

これらのかなり大きな減少傾向を総括するに当たっては、やはり昨年度はコロナ禍の影響を最初からまともに受けて、4月の授業開始早々から開始時期を5月中旬まで延期して急遽 Moodle や Meet による遠隔授業へ切替えて対応を行うなど当初からかなり混乱した状況であったことが、大学院の教育や研究指導にも少なからず影響していたことを考慮する必要があると言える。即ち、[A]の知識や能力の獲得程度に関しては、とくに前期では大学院の授業やゼミナールもほとんど遠隔授業となり、研究指導も曜日を決めて交代制という様な形態をとらざるを得ず、その影響が4、8、10、および11の項目に対する評価の低下につながっていると言える。つまり、院生としては研究室やTAで教員や卒研究生を含めた学生と直接接する機会が少なくなると、4、10、11の各項目で当然要求される問題解決能力や指導力を発揮する場が多くが失われることになる。また研究発表活動に関しても、コロナ禍では海外渡航を含めた国際学会への参加も制限されてほとんど機会がなくなり、国際的な研究発表の場へ参加する機会が奪われると、当然8の各項目での評点の低下につながらざるを得ない。

また、[B]の授業科目群や設備・機器の評価においても、2の双方向授業や4の研究・ゼミの指導は、やはりコロナ禍では厳しい評価にならざるを得ない。これらは教員の努力不足と言うよりも昨年度に関しては研究指導やゼミも含めて遠隔授業の対応に迫られたためむしろ不可抗力な結果と考えざるを得ない。また11や12の履修に関する諸資料や事務サービスに対する評価にも厳しいものがあるが、サービスの内容というよりも学生が来学する機会が減ったために生じる問題の方がむしろ根本にあると思われる。

以上のことから、今年度も前期は昨年度程の前期ほどではないものの、昨年度の後期と同様に遠隔授業による学生に対する来学制限が依然としてあるので、昨年度のこのかなり厳しい評価を受けて院生に対する指導のさらなる向上に努める必要がある。ただ[B]5～8の図書館やPCの等IT機器、教室の映写器等の設備については依然評価が高いので、今まで以上にこれらの活用を努めることが重要である。

添付資料なし

## 2020年度修了生満足度調査結果検討報告書

2021年06月14日

大学院工学研究科制御機械工学専攻

2020年度専攻主任 鄭 聖熹

昨年度は、コロナ禍の影響により大学院生の教育・研究活動が大きく制約される中で、修了生の満足度が概ね前年度の満足度水準に維持できた結果となった。これは、2020年度修了生においては、M1の一年間は大学での研究活動、国内学会発表等通常の大学院生活を送ることができ、コロナ禍の影響で研究活動が制約された中では、指導教員との遠隔研究ミーティングやゼミナール発表会等が適切に行われたためと考えられる。上記結果を踏まえた上で、アンケート調査における各項目の満足度評価結果について検討した内容を以下にまとめる。

### [A]大学院生活における知識や能力等の獲得程度の満足度結果について

教養や専門的知識・技能は、昨年度と変わらず良好な評価であり、専攻の教育研究指導が適切に行われていると考えられる。また、論理的な考え方や、的確な判断力、問題発見と取り組む力等の問題解決能力に関する評価が高くなっており、専攻で進めているゼミナールにおける研究関連の文献調査発表会の実施と、学会での発表の推奨が大きく効果を発揮していると考えられる。

国際的な視野については、依然として他の項目より満足度が低いが、コロナ禍の影響によりさらに下がっている。専門分野における国際的な視野は、専攻の開設科目である国際工学特論に対する受講学生の評価が高く、ゼミナール3での英語論文調査発表会の実施により、他項目に比べて比較的満足度が高い。しかし、異文化理解や国際交流については評価が昨年度よりさらに下がっている。これは、2019年度には院生5名が研究室のゼミ活動としてフィリピンへ渡航し、現地大学の学生らと交流を実施したが、今年度はそれが実施できず、結果的に評価が低くなっていると考えられる。これは、院生の海外ゼミの仕組みを大学として奨励する仕組みを導入することで満足度が改善できることを意味しているので、今後改善を検討する意義はあると考えられる。

今年度の評価結果の特徴として、コミュニケーション能力、リーダーシップ、協調性等人間力に関わる項目で高評価となっており、ティーチングアシスタントと研究室内での先輩としての立場が、修了生の主体的かつ積極的な性格と相まって良い結果につながったと考えられる。

### [B]授業科目群や設備・機器などについての評価について

コロナ禍の影響で、演習形式の授業や外部講師等による授業が満足に行われず、評価が低くなっていることが見受けられるが、ゼミナールに関しては、前期は遠隔発表会、後期は対面発表が実施できており、ある程度の効果はあったと考えられる。図書館の利用においても、コロナ禍の影響を受けていると考えられるが、その一方、パソコン等のIT機器、講義室の設備の充実度、新棟の完成等により、遠隔講義や遠隔研究指導の環境が整えられたことがプラス効果につながったと思われる。

自由記述において、大学の設備・機器等については、学生が自分で加工できる設備が少ないとの意見があり、安全対策を講じた上で院生らが自主的に機械加工等の実施ができるモノづくり空間を用意する必要があると考えられる。また、新A号館建設時のオープンラボコンセプトに対して懸念した点でもあるが、研究室ごとに壁がない等の理由で研究に集中できないとの意見があり、大学院の研究活動を充実させるための空間確保等の対策が必要であると思われる。

大学院について良かった点として、学会での発表を多く行っていることについての評価が高い。従って、院生が修了時まで学会発表1回以上は実施できるような仕組みを設けることで、より満足度をあげることが期待できる。また、国際工学特論や産学連携機械工学特論の科目で、現場で活躍しているエンジニアの講師らの講義に対する満足度が特に高いことから、これらの科目の受講を専攻として強く勧めるようにしていくべきである。

最後に、大学院での改善点として、他大学との交流や、他研究室との交流をもっと増やしてほしいとの意見があり、学内の研究室間又は他大学との共同研究を活性化する仕組みを設ける必要があると思われる。また、上記の大学の設備・機器の評価でも意見があったように、新A号館のオープンラボに対し、研究に集中できない、落ち着かない等のスペースのオープン化について改善を求める声があり、来年度、全研究室が新A号館に移動した際、大学院生の研究環境に対するアンケートを実施し、問題点があれば良質な研究環境を確保するための対策を講じる必要があると思われる。

## 2020年度修了生満足度調査結果検討報告書

2021年5月31日

大学院工学研究科情報工学専攻  
2020年度専攻主任 来海 暁

今年度の当専攻の総合評価(7.8点)は、過去4年間(2016年度:7.5, 2017年度:7.4, 2018年度:10.0, 2019年度:9.0)と比較すると、2018・19年度よりは低いが、2016・17年度よりは若干高くなっている。今年度の修了生数は6名であったが、2017年度が9名であったのに対し他の年度は4名以下であり、標本数が少ないことから評価点自体を単純に比較するのは難しい。しかし、今年度は当初から新型コロナウイルスの感染拡大により、大学院生にとってもさまざまな面で困難が生じていたことを踏まえると、総合評価の点数は過去2年に比べて低いとはいえ、むしろこの困難な状況下でよく健闘したと思われる。

授業に関しては、コロナ禍によりすべての授業が遠隔で実施されたにも関わらず評価が4以上であった。当専攻の特性として、ほとんどの学生が大学入学時より個人でノートPCを所有し、かつその時点から長期間にわたってネットワークを含むPCの設定や学内のクラウド環境に習熟していたことから、遠隔授業への移行にも支障なく対応できたものと考えられる。最も危惧していたのは、発表形式の情報工学演習が遠隔形式の下でも十分に授業として成立するかという点であったが、学生はネットワークを介して発表や質疑応答を活発に行っており、これらの能力の養成という本授業の目的が十分に達成されたと考えられる。

主に研究に関連する、教養、知識・技能、論理的思考力、判断力、創造力等の指標については軒並み昨年度の平均を下回っているが、これにはコロナ禍の影響が大きいと考えられる。研究面では、学内滞在の時間や人数に関する制限など、学生は例年に比べて相当の不自由を強いられた。当専攻はコンピュータがあれば研究が可能な研究室やテーマが多いが、それでも例年に比べて研究の進捗が遅いという声が多かった。研究室で腰を据えてじっくり課題に取り組んだり、ちょっとしたことでも教員や学生との間で対面で議論したりするという時間が失われたことが影響していると思われる。また、コミュニケーション力の指標もやや低くなっている。学会発表も遠隔形式となり、専門家との緊張感を伴う対面でのコミュニケーションを体験する機会には恵まれなかったことが反映されていると考えられる。その一方で、困難に立ち向かう力を最高点の5としている学生が多かったのが目を引く。研究環境の不自由さを乗り越えて学会発表を行い、修士論文を仕上げたことに加え、就職活動においても対面でのインターンシップがなくなったり求人自体が細ったりする中で、自主的に行動し内定を勝ち取ったという体験が大きな自信につながったものと思われる。

大学院生は学部生など下級生の指導を自分の貴重な経験と考えているようであり、リーダーシップやTA制度に関する評価点が高い。TA制度の充実とともに、学部生と協働したプロジェクトを積極的に推進することも今後は重要になってくると考えられる。

国際的な視野に関する評価が非常に低いのは例年と同じであるが、今年度は特に海外に出張することができなくなり、この点で国際学会への論文投稿の動機付けが大きく弱まったことが一因ではないかと考えられる。しかし、コロナ禍を契機としてこれからの国際学会は遠隔形式の要素を取り入れた形に展開していくと予想されるので、むしろ日本にいながら海外の研究者と手軽にコミュニケーションできることを学生が利点と感じ、国際学会での発表に意欲を持つように指導していくべきであろうと考える。

学生からの要望としては、教室へのHDMI端子の設置、大学のネットワーク環境の整備、事務サービスに関することが挙げられている。これらは毎年指摘されていることであり、改善に向けて努力する必要がある。

## 2020年度修了生満足度調査結果検討報告書

2021年5月31日

大学院総合情報学研究科デジタルアート&アニメーション学コース

2021年度専攻主任 原久子

※自由に記載下さい。

### 1) 全体について

アンケートのサンプル数が2名と極端に少ないので、あまり有意な調査結果とはならないかもしれないが、総合評価が前年2019年度より数値が下がっているのが気がかりである。原因を究明できるよう、今年度は逐次院生の状況を見ながら、改善に向けた活動をしたい。

### 2)

#### (A)

全体的に2019年度より数値が下がっている。「2 専門的な知識・技能、6 考えていることを図解などで表現できる力」などは若干のポイントの改善がみられ半面、「1 幅広い分野にわたる教養、5 自ら課題を見つけそれに取り組む力7、困難に直面してもそれに対処していく力、8a. 国際的な視野（専門分野）、8b. 国際的な視野（異文化理解）、8c. 国際的な視野（国際交流）、9 コミュニケーション能力、10 リーダーシップ、12 新たな課題を発掘して解決していく創造力」などのポイントが落ちている。コロナ禍で遠隔形式の授業が多かったために下がった項目が少なからずあったと考える。

学外の学会や研究会などの場に参加する学生は山路研の院生1名のみで、活動が教員主導の学内の課外プロジェクトなどに留まっている。ポイントが下がっている要因として、同世代がどのような活動をしているのかわからないまま過ごし、コロナ禍以前から活動範囲が限られていたからではないかと推測される。

学生の資質や姿勢によると思うので一概にコメントできないが、一般的な大学院生としての水準を認識するように指導する必要があると考える。

2021年度はまだまだ感染が収束したとは言えない状況ではあるものの、対策を万全にしたうえで可能な限り面接での大学院の授業、ゼミ指導を行いたい。

#### (B)

4.3 から 4.6 へ若干の改善がみられる。「1 講義形式の授業、6 図書館の利用しやすさ、7 パソコン等のIT機器の充実度・利用しやすさ、11 大学院履修要覧等の諸資料、12 学務課／四條畷学務課 事務サービス、13 寝屋川就職課／四條畷就職課 事務サービス」などの項目はポイントが改善している。「8 講義室等の映像・教材提示装置等の充実度、9 研究用実験室の設備・機器の充実度」などは若干のポイント低下がみられる。新型コロナウイルス感染拡大防止策として、対面での演習、実習のような講義が少なかったためだと分析できる。

#### (C)

教員自体が率先し学会など外部発表の場に積極的に参加できるよう導くことが必要だと考える。

全体) 大学院の学位品質維持・向上について、指導教員および専攻(コース)が責任をもって一層取り組んでいくことが必要である。

## 2020年度修了生満足度調査結果検討報告書

2021年 6月 13日

大学院総合情報学研究科デジタルゲーム学専攻

2021年度専攻主任 高見 友幸

今回の調査結果では、知識や能力の獲得に関する質問[A]は 3.9(昨年度は 4.0)、大学院教育や設備・機器に関する質問[B]は 4.0(昨年度は 4.2)、教育の全体を考慮した総合評価[C]は 8.2(昨年度は 8.0)であり、例年どおり高い評価が得られた。個別に見れば、[A]の「物事を論理的に考える力」が 4.6、[B]の「TA 制度(担当者の立場から)」が 4.6 と高く、一方、[A]の「国際的な視野」が 3.0~3.2、[B]の「大学院履修要覧等の諸資料」が 3.2 と低い評価であった。ただし、今回の調査人数は 5 名と少なく、これら 2 項目の低評価は、2 項目ともに 1 名が評価 1 と回答したことが利いている。

国際的な視野という観点については、各研究室で意識的に指導されているものの、低評価となる年度が多い。本学では全学的に弱い項目で、むずかしい問題ではあるが検討を要する。大学院履修要覧等の諸資料のあり方についても、次年度に向けての検討項目としたい。

評価 3 以下の回答がなかった項目(全員が 5 か 4 の高評価とした項目)は、「物事を論理的に考える力」「考えていることを図解などで表現できる力」「研究用実験室の設備・機器の充実度」「TA 制度(担当者の立場から)」で、評価の平均は、それぞれ、4.6、4.2、4.2、4.6 である。この 4 項目については、有意な高評価であると考えてよい。修了生の研究状況から見ても妥当な結果である。

なお、2020 年度修了生はコロナ禍の影響を受け、修士 2 年目のほぼ全期間で多少とも通常と異なる研究状況にあった。研究プロジェクトの中で実施された研究への影響が懸念されたが、満足度の調査結果には問題として現れていない。これは、2020 年度の修士論文／修士制作の発表内容が例年と比べ遜色のなかったことから妥当な結果であろう。

## 2020年度修了生満足度調査結果検討報告書

2021年6月10日

大学院総合情報学研究科 コンピュータサイエンス専攻

2020年度専攻主任 升谷 保博

本専攻の総合評価の平均値は、2018→2019→2020年度で8.0→8.3→8.2と変化しており、比較的高い値を維持できている。

設問[A]「本学での大学院生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか？」については、全項目の平均値は、2018→2019→2020年度で3.7→3.5→3.7と推移しており、2019年度からわずかに上昇した。多くの項目で評価は上昇しているが、以下の3項目で下落している。「5 自ら課題を見つけそれに取り組む力」(4.0→3.7)、「11 他人と協調して主体的に物事に取り組む力」(3.9→3.8)、「12 新たな課題を発掘して解決していく創造力」(3.8→3.6)。いずれも社会人基礎力として重要な内容であり、今後の課題としたい。この設問の自由記述の回答はなかった。

設問[B]「本学での大学院教育を振り返り、以下の授業科目群や設備・機器などについて全体的に評価してください。」については、全項目の平均値は、2018→2019→2020年度で4.1→4.0→4.0と推移しており、同じ水準を保っている。2019度に変化の大きかった「8 講義室等の映像・教材提示装置等の充実度」(4.3→3.5→4.1)と「10 T A 制度(担当者の立場から)」(3.8→4.5→4.0)は、それぞれ逆方向に揺れ戻っている。TA制度については、年度ごとに変化が大きく、その分析が必要である。この設問についても自由記述の回答はなかった。

自由記述には、肯定的な内容が多かったが、改善を求めるような内容で特に具体的なものとして以下があった。

- 学務課がもうちょっと融通がきいたらよい
- 履修登録をwebでできるようにしてほしい
- 就職課のサポートがほとんどなかった
- 他研究室の院生や学部生との交流の機会があれば良い

大学に長く在籍した修了生の声にはしっかりと耳を傾ける必要がある。

以上

## 2020年度修了生満足度調査結果検討報告書

2021年6月10日

大学院 医療福祉工学研究科 医療福祉工学専攻

2020年度専攻主任 田中 則子

設問[A]本学での大学院生活を通して獲得した知識や能力においては、すべての項目で3.0以上、平均3.8であった。各項目を見ると、12項目中8項目において昨年度よりもポイントアップしていた。その中でも昨年度2.7～3.0であった「国際的な視野について」は0.3～0.8ポイント満足度向上がみられた。今後、学生の国際的な視野拡大にむけて、海外論文やその他国際情報に触れる機会の工夫など継続的に努めていきたい。

設問[B]本学での大学院教育(授業科目群、設備・機器など)においては、すべての項目で3.7以上、平均は4.0であった。その中でも昨年度に比して「研究やゼミにおける指導」は0.6ポイント、「TA制度(担当者の立場から)」は0.4ポイント向上していた。一方で、授業や施設利用に関連する多数の項目で満足度が低下していた。これには昨年度から広まったコロナ禍での活動が影響していたと考えられた。このような環境での学生生活や就職活動を支援頂いた「四條畷学務課や四條畷就職課の事務サービス」に関しては満足度が向上しており、職員の方々のご尽力に感謝したい。

[A][B]の結果を踏まえ、設問[C]本学での大学院教育に対する総合評価は、8.4ポイントであった。昨年度には及ばなかったが、これは前述のコロナ禍における授業や施設利用の満足度低下が影響していると考えられる。しかし、自由記載欄には指導教員との出会いや面倒見の良さ、教員との距離が近いといった好意見が多くみられ、担当教員個々の努力によって高評価が維持できていた。今後も履修や他研究室教員との交流なども含めて、さらに大学院教育の充実に取り組んでいきたい。

■参考

当報告書と合わせ下記の資料が参考となることを、添えておきます。

『教育基本3方針（ポリシー）』

<http://www.osakac.ac.jp/about/policy/>

2021年6月  
教育開発推進センター  
寝屋川キャンパスA号館1F  
〒572-8530 寝屋川市初町18-8・内線：3129  
ced-office@osakac.ac.jp